

古勝隆一著

『中国中古の学術』

佐藤達郎

本書は、中国「中古」学術史の気鋭の研究者である著者が、東京大学の学位論文をもとに後漢・唐代の学術史に関する論考を大幅に増補し、二〇〇六年に一冊の本として上梓したものである。

評者が著者より本書の書評の依頼を受けたのは既に四年前のことであり、それが今に至るまで延びてしまったのは、ひとえに評者の怠惰による。中国思想史の分野について全くの素人である評者は、最初その依頼を受けかねたが、門外漢の立場から評する所に著者の意向があるかと考え、敢えて引き受けた次第である。読み進めつつ、本書の示唆に富む手堅く密度の高い叙述に多々啓発を受けるとともに、本書の成果を客観的に判定する資格が評者にはないことを改めて思い知った。書評とは本来、対象著書がステータスとする研究分野の研究史と現況、その中の著書の位置づけを把握した上で、その学術的到達点と価値、問題を自身の立場から論ずるべきものであるうかと思うが、右記の次第で、本文はその責めをふさぎ得ないことを最初に断っておかねばならない。

まず、序論に従って著者の意図と構想を紹介する。本書の表題の「中古」という時代呼称について、序論で著者は世界的な含意を強く持つ「中世」ではなく、敢えて漢語圏での伝統的称謂に

做うとしつつ、本書の対象とする後漢末から唐までの時代を、その前後とは区別された、一つの個性ある時代と把握しようとする。また著者は思想史と学術史を区別し、思想内容とその系譜を考究する思想史に対し、思想を成り立たせる学問の場に注目する学術史を、本書は関心の中心に置くとする。著者はこうした学術史研究の先駆的業績として陳寅恪、牟潤孫両氏の研究を挙げ、それらの方法を継承しつつ、伝統的な目録学を活用してこの時代の学術、特に注釈学の特質と展開を論ずる。

中古期の学術は往々にして国家と密着した環境から生まれた。これに関し、古代の学問が国家と深く関わって生まれたとする古典的見解を著者は参照に値するものとして挙げつつ、一方で、こうしたあり方を見せる中古期の学問が、国家権力の荘嚴の具となり果て、学問的生命を失ったとする見解を例に挙げ、このように皇帝権力と貴族を対立的に捉える図式を批判する。そうして「貴族の合意を母体として運営された」国家の関与が、この時代にむしろ学術の発展をもたらしたことを強調するのである。

以上の展望を序論で述べた上で、続く各章で展開される議論は、大きく上篇「中古注釈学をめぐる学術史的背景」と下篇「中古注釈書研究」の二部に分かれる。上篇は魏晉の注釈書と南朝の義疏およびそれを生んだ講經を扱う。下篇は晋唐間の各注釈書を取り上げ、それらを生んだ時代状況、学術潮流について論ずる。

上篇第一章「後漢魏晉注釈書の序文」は、後漢末から魏晉期に集中的に作られる、諸経書のいわゆる「古注」について、それら注釈の序文の集成・形式分析を通じて、その出現の学術史的背景および劉向父子「叙録」との関係を考察する。後漢以降の経書注

釈を以前のものと分ける特徴は、経文と注文が一書に合併されたこと、また注釈家が自身の責任で序文を書くようになったことであり、かつ後漢魏晋の諸注釈書序文は互いに似た形式を持つ。これらの成立には劉向父子の校書が直接の影響を与えた。劉向らの「叙録」は、従来の学派内での師授の枠を超え、はじめて書物を外側から客観的に解説した。その影響の結果、「叙録」と漢魏注釈書序文とは内容上、多くの共通点を有したが、それは後漢の學術環境すなわち学問の学派外への開放、注釈書を通じて学問を理解する読者層の増加ゆえでもあった。本文と注の一書への合併もそれによる。なお劉向叙録以後、経書の注釈書序文成立に先行するものとして王逸『楚辞』注序を挙げ、文学作品である同書の受容形態が、経書のそれに先行した可能性が示唆される。

第二章「釈典学と義疏学」は、南北朝期に主流となった経の注解形態である義疏と、その發生に深く関わる魏晋以来の釈典礼を扱う。義疏とは単疏の形をとり、口頭での講義に関わって、南北朝から唐にかけて成立した注釈とされる。その漢魏の注との大きな違いとして著者は、目録上、義疏が単行本として扱われる点を指摘した上で、改めて牟潤孫氏の述べる、講經との関係に注目する。牟氏は仏教の講經・義疏が儒教のそれに先行したことを強調するが、著者は、儒家独自に義疏を生んだ行事として釈典礼に注目し、その曹魏以来の諸例を確認するとともに、遅くとも東晋中期には釈典に伴う講經をもとに義疏が編まれたことを論証する。

評
書
第三章「南斉の国学と釈典」は、南斉永明三年の釈典の国学・礼典編纂事業との関わり、および梁の釈典と礼制への継承を論ずる。南斉の国学は常置された教育機関ではなく、釈典、皇太子と

密着して設けられた礼制関連機関であった。南斉の国学は礼典編纂の中心でもあり、南斉に始まり梁代に完成される「五礼」の編纂には、南斉の歴代の国子祭酒が主持者として参与した。国学と礼典編纂との関係は梁代にも継承され、国学の五経博士は同時に五礼編纂の責任者でもあり、かつ彼らは南斉以来の礼学者であった。南斉から梁への連続性は、天監八年、昭明太子の奉行した『孝経』講義と釈典にも見て取れる。このとき各役割を分担した参加者はみな南斉永明年間の東宮職・国学生、ないし斉初の功臣の子で、中でも沈約には南斉と梁の釈典をつなぐ役割が期待された。齊梁の學術活動と国家機関・行事との深い関係が指摘される。

第四章「都講の再検討」、第五章「高座について」は、南北朝の講經における仏教の一方的な影響を強調する牟潤孫説に対する反論である。都講とは講經において質問を担当し、問答形式の議論展開を促す者であり、牟氏はこれを仏教起源と見た。筆者は牟氏を含む六人の説を紹介した上で、私見として、南北朝義疏学における都講が漢代儒学に起源を持ち、それがやがて仏教にも取り入れられたものとする。次に、講經の場で講師・都講の座する高座が、仏教起源であるか否かが検討される。古代の中国では牀の上に正座をする跪と呼ばれる座法が一般で、魏晋南北朝時代に胡牀と腰掛けの風習が西方より流入した。この風習を高座と結びつける牟氏に対し著者は、高座を漢代の牀の延長上に捉え、聴講者の増加とともに次第にそれが高くなったものとし、またこうした座具に法師が腰掛けたことの積極的証拠はないとする。

下篇第一章「郭象による『莊子』刪定」は西晋・郭象の『莊子』注とその本文刪定を取り上げ、そこに一貫する思想を読み取

る。高山寺本『莊子』郭注序文に明言される郭象の『莊子』刪定の意図は、主に外篇の經世に関わらぬ議論への冷淡な扱い、雜駁と彼の目には映じた諸篇の削除として現れ、その作業を通じて彼は『莊子』の思想的・一貫性を純化しようとした。一方、彼が重んじた特に内篇諸篇には、論理の流れまで示す入念な注をつけ、篇題にも彼の思想を強く投影した要旨が付せられる。また当時流行した談辯の影響下、論敵を設定した議論の中では、無用の業を称え、競争をおおる「旧説」「惑者」が批判される。こうした彼の思想は「齊物」を鍵として読み解かれる。他から差別された個々の存在は、「聖人」の統括する齊物的世界のもとで、各自の性に安分しつつ齊一に位置する。その秩序を脅かすのが欲望と競争心であり、故に郭象はそれを解消する思想を必要とした。『莊子』を経国の書として読み抜いた彼の強力な思想操作により、同書は太古の雜多さを抜け出し治世への求心力を獲得したと著者は結ぶ。

第二章「賈大隱の『老子述義』」は、大儒賈公彦の子、賈大隱の『老子』注解を取り上げ、その唐代学術界における位置を論ずる。中国では早くに散逸した『老子述義』は、日本の書籍に多くの佚文を残す。著者は目録を根拠に同書を義疏と判断し、また佚文を根拠に河上公注の敷衍とする。同書に収めていた河上公本の序文を、日本の諸写本の引用に見ることができ、その序文は、敦煌写本などに見える河上公注序「老子道德經序訣」とは異なる。『述義』が前者を採った理由として、賈大隱の拠つた河上公本は儒家的士大夫の間に、「序訣」を付するテキストは道教界の人々の間に、それぞれ流通した可能性が示唆される。河上公本は唐初に盛行し、その引用例は北斉にまで遡る。北斉系の学者は隋から

唐初の学界に大きな影響を持ち、賈公彦もその環境の中に学を受けた。彼らの傾向として老莊の学への理解を指摘でき、その学的影响のもと、『述義』にも儒家的な注釈形式の一方で、『老子』学さらに仏学の影響が見られる。孔穎達「礼記正義」における玄学の影響も、こうした北朝經学の伝統を汲むものである。

第三章「『孝經』玄宗注の成立」は、開元九年成立の『孝經』玄宗御注をめぐる議論を通じ、当時の学界の動向と、そこにおける隋・劉炫の『古文孝經』注解の影響を述べる。開元七年に始まる劉知幾ら『古文孝經』の支持派と司馬貞ら『今文孝經』支持派の対立は、今文を底本とする御注の成立により、今古文両者の注を排除する形で決着を見た。この開元初注『孝經』は日本にのみ残本が存するが、その序文には御注撰定に関与した学者として劉知幾・司馬貞のほか八名が挙がり、うち六名は太子・諸王付きの侍読として開元七年の齒曹礼（釈典）での講義にも参加している。これら諸儒が司馬貞とともに劉知幾を攻撃した裏には、宰相の宋璟らの意向があった。しかし宋璟の下野も背景とした劉知幾の参与の結果、『御注孝經』には『古文孝經』と孔安国伝の影響が見られ、さらに『御注』と疏に基づく『孝經正義』には、『古文孝經』を世に知らしめた劉炫『孝經述義』の説が引かれることになった。著者はその引用を新たに数か条発見する。さて天宝年間の重注の際、同書には新たに御序が冠せられたが、この一部は今文を難じて古文を持ち上げる劉炫『述義』序をもじって逆に読み替えたものである。

第四章「御注『孝經』開元初注本をめぐる」は、日本にのみ伝わる『御注孝經』開元初注の諸本を系統的に紹介し、前章の論

を再確認するとともに、重要な写本として、京大付属図書館蔵本から得られる知見を述べる。一般に開元初注本のテキストとして古逸叢書本など三條西本系のものが広く用いられるが、文字の校訂には他系統のものも参照する必要がある、特に清家文庫本系の京大本はテキストとして優れるのみならず、書き入れに高い価値を有する。著者は同本の書き入れに見える元行冲疏を邢昺疏と比較し、後者が前者を基本的には踏襲しつつも、「孝道」の語の言い換えなど一部に刪改の見られること、また従来、皇侃が初めて『孝経』章題を冠したとされてきたが、これは邢疏の脱字に基づく誤りであることを指摘する。

第五章「韓愈の排仏論と師道論」は、次代への展望をなす章である。中唐の思想家、韓愈の著名な排仏論と師道論、この二つを著者は、師道論の道統論との合流を鍵として、儒教復興の理念のもとに結びつける。即ち少長を問わず道を悟る先覚者を師とすべきことを彼は主張し、自身を、孟子以来衰微をたどる儒教の道統の末に位置づける。そうして弟子とともに仏・道の邪教を排し、正しい道統の復興を志すのである。こうした彼の師弟論は、当時の一般的な師・弟子のあり方に照らして特異なものであった。さて彼が弟子とともに道統の復活を志したなら、弟子たちはその期待にどう応えたか。五人の弟子たちの言論を検討すれば、総じて彼らの排仏論は韓愈のその単なる繰り返しで、しかもその排仏の論調にも揺らぎが見られた。韓愈の構想は、唐代にあつては未だ受容されざる異端であった。

以上、本書のごく大まかな概要を紹介したが、著者の言外の思

考的伏流を把握できているか、おぼつかない所である。また紙幅の關係で紹介できなかった独自の魅力的な創見が本書には随所にちりばめられている。それらの知見の挿入がときに論理の流れを妨げるくらいも無くはないが、これは史料と対象に忠実に向かい合おうとする著者の姿勢を示すものでもあろう。独善的に単純な図式を想定し、それに沿った解釈を進めるのでは決してなく、前近代以来の学的蓄積への深い理解のもと、目錄学、書誌学といった古典的な學術手法を駆使しつつ、史料を博搜互証して情報を正確にくみ取っていく。序文で述べられる、伝統學術の重厚な方法と成果の継承に、本書はよく成功していると言つてよいだろう。

先述のように評者は中国哲学史の立場から本書を評する資格を持たないが、評者が本書の書評を委ねられ、また「史林」という歴史学雑誌上での論評の機を与えられたのは、學術を生む環境の問題意識の焦点に据える本書の成果を、敢えて歴史学の分野に問おうとする著者の意向である。残された紙数はわずかだが、試みに以下、思いつくところをいささか述べてみたい。

本書では後漢末から唐代に至る広い時代範囲の中で、いくつかのテーマがトピックとして取り上げられ、それらを成り立たせた当時の学的環境が論ぜられる。本書の扱う時代範囲はいわゆる貴族制の時代として理解されることが多く、従つて当時における学的環境の変遷は貴族制の盛衰とも深く関わるはずである。例えば、漢魏注釈書序文を生んだ、学派の枠を超えた広範な読書人の出現という歴史背景を別の角度から見れば、かつて川勝義雄氏が論じた知識人層の全国的ネットワーク形成といった事象との関連が容易に想起される。およそある著作や学的活動の背後には、当時の

歴史的概況と緊密に結びついた時代精神とでも言うべきものが強く働いたに違いない。党錮にきわまる後漢士大夫のパブリックな言論活動と、広汎な読者に訴える注釈書序文の発生普及とは、決して無関係ではないだろう。しかしそうした時代的气氛は、郭象がその注釈の中で浮華と競争の風潮を批判した西晋時代には既に変質しつつあったのではなからうか。西晋時代に注釈書序文を記した学者の中に、杜預、衛瓘、范寧といった時事批判の文章を残した人物の見られることは、そういった意味で象徴的であるように思われる。一方これら古注が姿を消していき、入れ替わりに講經に基づく義疏が盛行し出す東晋時代は、門閥貴族制の完成した時代とされる。牟潤孫氏の指摘した談辯の流行に加え、「王と馬、天下を共にす」と言われるような政治と国制のあり方は、国家的行事である講經への貴族らの積極参加、それに伴う学問の活況とも関わりを持つに違いない。そうであれば更に、釈典自体はその後も伝統として継承されるにせよ、講經に伴う義疏的な学術活動が唐代以降衰退していくことの背後にも、文化風潮と国制上の変化を想定できるかもしれない。

貴族との合意のもとで運営された当時の国家の関与が、学術を進展させる原動力となった、これが本書を貫く大きな見通しである。中古期以前における学が官廷と密着したものであったことは、一つには即物的に書籍のあり方に規定されていたに違いない。吉川忠夫氏も述べるように、印刷の普及以前の時代にあつて、手写による少数の書籍は宮廷の秘書と一部の門閥貴族に独占されており、そこに両者を中心とした学術の興隆および両者の接近の契機が蔵されていたであろうことは、想像に難くない。その際、両者

の関わり合いを表面的に見るだけなら、学問は国家の従属物としたとする見解も成り立ち得よう。しかし著者は門閥貴族の中に連綿と流れる強固な文化的伝統——北朝から隋唐への学問系譜の連続性、また南斉と梁の礼学の連続性にそれは具体的に現れている——を、同時代の学問の基盤の一つと見た上で、これが皇室を中心とする国家行事の場を触媒に発現する、と考えるようである。その意味でイニシアチブは貴族にあるとも言えよう（但し著者が皇帝権力と貴族勢力とを二項対立的に捉える図式を強く否定することは先述の通りであり、評者もそれに同意する）。それでは、彼らはそれぞれの時代状況の下、どのような立場、意識を以て国家的事業に参与したのであるか。たとえば後漢の一群の学者たちが王朝への強い思念の中で学術活動を展開したことを、評者は以前に駁文で述べたことがある。本書でも郭象の構想の中にある強い経世への念が指摘されるが、沈約、ないし劉知幾らにも、時代性ゆえの色合いの違いこそあれ、それに類する意識を見いだすことができなからうか。また、特に下篇で賈大隱や韓愈らに関わって触れられる、北方士大夫における質実な儒家的伝統も、彼らの国家的な学術活動・言論への参与の、一つの動因と見ることができないであらうか。因みにこうした北方士大夫の伝統が国家理念にまで昇華された例として、かつて谷川道雄氏は西魏・蘇綽の「六条詔書」を論じ、かつそれへの批判として渡辺信一郎氏は、その士族倫理を「皇帝権力とともにあるもの」とした。こと北朝に於ける、士人の伝統的理念と国家との強い接近が、当時の学術のあり方にどのような影響を与えたか、興味のあるところである。

その意味では、本書が魏晋南朝と唐を主に扱い、北朝期に関する専論のないことは、いささか点購を欠く感を与える。北朝では東晋南朝と並んで漢代以来の學術を繼承発展させつつ、北方士大夫の伝統と北族的な強力な国家権力のもとに、隋唐につながる新たな展開が見られたものと思われる。その一環として、例えば科挙の成立を位置づけることもできるのではなからうか。南朝の義疏から唐代の疏への質的転換も、科挙の実施とも関わる、国家的統一見解の必要と無縁ではないであらう。

近年、日本の東洋史学界、ことに中古時期のそれについては、中国思想史との学際的研究・活動が盛んである。特に、両漢期のいわゆる「儒教国教化」論争の再燃、また魏晋南北朝期の貴族制と思想文化に関する議論などに、そうした気運が顕著であり、それら学際的活動を通じて論争の活発化と研究の盛況がもたらされるのは喜ばしいことである。東洋史の側に即して言えば、従来、政治史さらには制度史といった多分に文化史の領域と接点を持つはずの分野からも往々、そうした視点が意図的にか捨象されてきたことへの、これらは一つの反省でもあらうかと考える。ただ思うに、元来同じ伝統学問を母胎の一つとする東洋史と中国思想史とではそれぞれ異なる問題意識と手法を有するもの確かで、分野と次元の異なる議論の安易・無批判な接合、あるいは自説に都合のよい論点の「つまみ食い」には気をつけねばならないだろう。たとえば著者が序文で批判する、皇帝権力と知識人との対立関係の中で儒教を捉えようとする思想史家の見解は、権力、対抗といったキーワードゆえに、現実の政治と体制の説明にも援用されやすい。しかし思想内容と現実政治とは常に直結する訳でもなく、

一方が一方を規定するものではない。その点、思想を成り立たせる学的環境に注目する本書の成果は、いわば中国思想史の側からの、歴史学との協働の古くも新しい試みといえよう。中国思想史と東洋史との間の、皮相な相互利用にとどまらぬより深い学際的理解の進展のためにも、本書が歴史分野の研究者に広く読まれることを願う。その一助として拙文がささやかながら寄与しうれば幸いである。

- ① 川勝義雄「貴族政治の成立」(同氏「六朝貴族制社会の研究」岩波書店、一九八二年所載、初出一九五〇年)
- ② 田余慶「東晋門閥政治」(北京大学出版社、一九八九年)
- ③ 牟潤孫「論魏晋以来之崇尚談辯及其影響」(同氏「注史齋叢稿」上、中華書局、一九八七年所載)
- ④ 吉川忠夫「六朝士大夫の精神生活」(同氏「六朝精神史研究」同朋舎、一九八四年所載、初出一九七〇年)
- ⑤ 谷川道雄「西魏「六条詔書」における士大夫倫理」(同氏「中国中世社会と共同体」国書刊行会、一九七六年所載、初出一九六六年)
- ⑥ 渡辺信一郎「天空の玉座」(柏書房、一九九六年)第二章第二節三「蘇綽「六条詔書」の民衆・国家観—中国古代国家の成り立ち—
- ⑦ 保科季子「近年の漢代「儒教の国教化」論争について」(『歴史評論』六九九、二〇〇八年)
- ⑧ 第五四回国際東方学者会議(二〇〇九年)第VIセッション「漢魏交替期における社会と文化」など。

(A5判 四一五頁、索引一九頁 二〇〇六年十一月)

研文出版 八五〇〇円+税)

(関西学院大学教授)